特集

島義勇の冒険

―古武士が夢見た麗しき春

島義勇は、札幌市役所1階のロビーでは旅姿で彼方を見つめ、
北海道神宮の境内では開拓三神を納めた唐櫃を背負っている。
幕末、蝦夷地と樺太を探査し、1869年（明治2）、本府を札幌に定めて都市の基盤を築いた。
非業の死から、今年で150年。島はどんな時代を生き、何を夢見たのだろう。
古武士を通して、激動の時代が見えてくる。

佐賀藩の最先端テクノロジー

一八二二年（文政五）、佐賀藩士の子に生まれた島義勇は、名君、鍋島直正の治世を見て育った。

佐賀藩十代藩主・鍋島直正は、長崎警護を担ったことで海外の最新情勢に触れ、強い危機感を抱いたとされる。産業革命によって造り上げた鉄製大砲や蒸気船の威をもって、アジアの植民地化をもくろむ欧米列強。既にアヘン戦争によって、イギリスは清に香港を割譲させていた。直正は、国防には科学技術が不可欠と痛感し、鉄製大砲の製造に欠かせない溶解炉である反射炉を日本で初めて完成させた。幕府が築いた品川台場（現・お台場）に据えられたのも、佐賀藩が造った鉄製大砲だ。国産初の蒸気機関を開発し、磁器、茶、石炭などの産業を育てた。島も学んだ藩校・弘道館では子息の成績が父親の禄に影響したので、子は刻苦勉励し多くの人材が育った。大隈重信の鉄道推進の原点も佐賀藩にある。一八五五年（安政二）、佐賀

（写真上）（右）1971年の札幌市役所新庁舎竣工時に設置された島義勇の像。作者は山内壮夫氏。東側が過去、中央が現在、西側が未来を示すデザインのロビーの東側から西向きに立つことで、自ら登って石狩平野を眺めた円山界隈を市役所から望む形となっている。（左）社号が札幌神社から北海道神宮に改まって10年の記念事業として、1974年、北海道神宮境内に建立された島義勇の像。作者は宮地寅彦氏。

文＝北室 かず子
写真＝田渕立幸

オランダの書物を頼りに、佐賀城下の築地（ついじ、現・佐賀市長瀬町）に完成した日本初の反射炉（左端）。1851年（嘉永4）には良好な溶鉄ができた。右端には日本在来のたたら製鉄も描かれている。1853年のペリー来航後、幕府からの鉄製大砲の注文を受け、新たに多布施（たふせ）反射炉が建造された。技術を独占しない方針で、箱館の諸術調所教授・武田斐三郎も見学した。直正、島の他、佐野常民、副島種臣、大木喬任、江藤新平、大隈重信、枝吉神陽の「佐賀8賢人」を輩出した佐賀は、近代日本の礎を築いた人材の宝庫でもある。「築地反射炉絵図（考証復元図）」（公財）鍋島報效会所蔵

藩の技術者が蒸気機関車の模型を走らせた際、十代の大隈も見学したであろう。後に明治政府の若き官僚となった大隈は、鉄道建設を主導し、日本初の鉄道が一八七二年（明治五）に新橋～横浜間で開業。その後、鉄道は全国に張り巡らされ、近代国家の原動力となる。

直正は、南下するロシアへの国防のため、そして藩の産物の新規市場としても蝦夷地を重要視していた。その蝦夷地を探査する命を受けたのが、島義勇だった。一八五六年（安政三）九月に九州を出発。海路と陸路で箱館に到着し、松浦武四郎の協力を得て、翌一八五七年三月、蝦夷地と樺太を巡検する箱館奉行・堀利熙の一行に加わった。日本海側を北上し（※1）、七月に樺太を踏査した。帰路はオホーツク海側を南下し、根室を経て太平洋側の釧路、様似、室蘭を通り、九月に箱館に戻っている。道中の地形、アイヌの民俗、産物などをつぶさに記録したのが『入北記』だ。発寒や星置（現・札幌市）に入植した人々の畑の作柄まで記し（※2）、この時の島が予想していたかどうかはさておき、後の職務にとって極めて有益な見聞となった。

蝦夷地から帰ると蒸気船「観光丸」の艦長として佐賀藩の軍備増強の最前線に立った。やがて、鳥羽・伏見の戦いが起き、島は激動の時代の真っただ中へ。江戸では勝海舟に対し、幕府所有の軍艦を新政府へ引き渡すよう談判した。新政府に登用されると一八六九年（明治二）五月に蝦夷地開拓御用掛に就く。七月、開拓使設置とともに鍋島直正が長官に、島は判官に任命され

『入北記』のうち「トーフツの沼」（現・サロマ湖）を描いた部分。北海道大学附属図書館所蔵

（※1）『入北記』は4冊のうち、箱館から樺太までの部分が未発見のため、同行者の日記から推測。（※2）札幌周辺の巡見の際、島は千歳で療養中で、一行から聞いたことを記している。

コタンベツの丘付近とされる円山公園に建つ島判官紀功碑。

た。しかし八月、直正は大納言に昇任し、後任に東久世通禧が着任。長官以下、箱館で指揮を執るべく北海道へ出発する前に、直正の激励を受けて感激した。その後、明治天皇に拝謁し、島は「どんな苦しみにも耐えて一心に努力し、たとえ自分の体が北海の氷の下に朽ちても千年も万年も誠の限りを尽くしたい」と、決意を固めた。

世界一の都を構想

北海道本府の場所は、内陸に平野が開け、石狩川を遡れば宗谷にも根室にもつながる石狩の札幌付近が最適というのは近藤重蔵、岡本監輔、松浦武四郎、箱館奉行ら蝦夷地通の共通見解だったが、最終判断は現地に入る島に任された。島は「重要なことは函館駐在の長官の判断を仰ぐが、ささいな事柄は判官である自分に判断させてほしい」とする旨の伺いを太政官に出し、許可されている。十月一日、大国魂神、大那牟遅神、少彦名神の開拓三神の御霊代を納めた唐櫃を長官から引き継ぎ、島は函館から陸路、石狩を目指す。馬の腹までぬかるみに浸かる悪路を、風雪にさらされながら十二日かけて銭函に到着。開拓使銭函仮役所を設置した。北海道神宮の教化部長で権禰宜の中島正倫さんはこう語る。

「銭函から雪道を馬で札幌に入った島は、円山界隈のコタンベツの丘に登ってすばらしい地だと感激し、この丘に開拓三神を祀る神社を建立して本府を作ろうと決めたのです」。ここに札幌神社が建立され、昭和の時代に明治天皇が増祀され北海道神宮となった。島は、札幌の印象をこう詠んでいる。

河水 遠く流れて 山 隅に峙つ
平原千里 地は膏腴
四通八達 宜しく府を開くべし
他日 五洲 第一の都

遠く河水がゆるやかに流れ、一方の隅に山がそびえている。ひろびろとした平原が千里の彼方まで続き地味は豊かである。北海道の各地へ道を通じるに便であり、まさに首府をおくに最適である。いつの日か、おそらく世界第一の大都になるであろう。（北海道神宮奉賛会発行『島義勇漢詩集北海道紀行』上田三三生 訳注）

開拓三神と明治天皇が祀られている北海道神宮。毎年4月13日に島の慰霊祭を執り行い、2013年には開拓判官島義勇顕彰会が発足し、翌年から顕彰の集いも開かれている。

開拓判官島義勇顕彰会が発行した『島義勇物語』。

榎本さんは、膨大な歴史資料を検証することで、歴史の点と点の間の空白を解明していく。

『佐賀偉人伝05 島義勇』（佐賀県立佐賀城本丸歴史館）。

島は、十一月半ばの二日間で札幌本府の縄張りを行った。『佐賀偉人伝05 島義勇』の著者、榎本洋介さんはこう語る。「北端に三百間（一間は約一・八メートル）四方の本府と、周囲に土塁、堀、空閑地を設け、官邸、病院、学校を配置しています。その南に四十二間幅の空閑地を設け、空閑地の南には本町が描かれています。空閑地は防御のためと、官民を分けるためのものと考えられます」。この空閑地が現在の大通公園である。官邸が完成すると島は銭函から札幌に移り住んだ。夜は土が凍結し、床を十センも持ち上げる寒さだった。函館からの食料を積んだ船が難破して深刻な食料不足に陥り、場所請負人を官吏に任命し各場所から非常用に備蓄していた米を調達して飢えをしのいだ。「それに加えて各漁場の出稼ぎ人たちを札幌へ引き取ったようです。本府建設の労働力を確保するとともに、その賃金を支払うことで人々を保護する目的もありました」と榎本さんは言う。無謀とも思える真冬の建設作業を断行した裏には、厳寒の苦難を共に生き抜くための深い知略があったのだ。こうして本府建設にまい進していた島だが、突然、東京へ呼び出され、一八七〇年（明治三）二月十一日、札幌を去る。

なぜ本府建設開始からわずか三カ月で辞めたのか。この最大の謎に、榎本さんは「島が東久世長官の指令に従わず、資金を蕩尽したために解任されたと伝えられてきました。しかしこれは東久世が日記に決意を書いただけで、辞めさせたとは書いていないのです。むしろ東久世は島に『持っていったお金では足りないだろうから今、用意している』と書き送っています」と、意外な指摘をしてくれた。

島の解任の背景には場所請

現在の創成橋（そうせいばし）付近（南1条東1丁目）。

1871年頃の創成橋付近。建物は開拓使本陣。北海道大学附属図書館所蔵

銭函～札幌間の交通の便をよくするために1869年12月の夜、2地点でのろしを上げて目印にし、まっすぐな道を開いたと伝えられている付近（北5条西24丁目）。

負制を廃止した開拓使の政策がありそうだ。既得権益のある場所請負人は反発し、函館ではいったん取りやめたが、島は決定通り、石狩の場所請負人に廃止を指令した。「開拓使は場所請負人らが旧幕時代に産物会所から借用した資金を返すよう要求もしていました。場所請負人にとって死活問題で、政策への不満となって開拓使の頭越しに国への嘆願をしたのです。いわば新政府への一揆です。訴えが出た以上、誰かが責任を負わなければならず、島が辞めたのではないかと考えています」と榎本さんは語る。

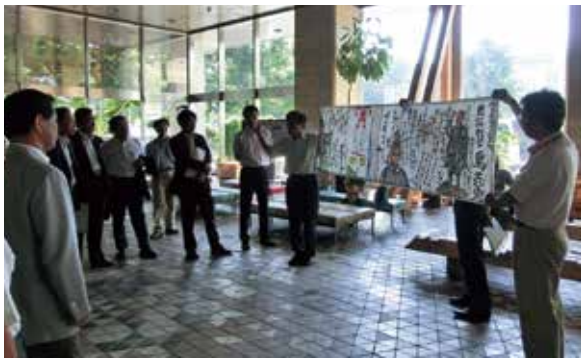
札幌を去った島は一階級上がって、大学少監に就任。榎本さんいわく「昇進したことからも、処罰とは考えられません」。その後、明治天皇の侍従になり、廃藩置県後は初代秋田権令（知事）として新県庁の開設や八郎潟の港湾建設に尽力した。

やがて全国で士族による不穏な動きが起こる中、佐賀県では憂国党や征韓党が結成された。情勢を憂慮した太政大臣三条実美から、佐賀に行き、士族を鎮めるよう頼まれ、一八七四年二月に帰郷する。しかし現地で憂国党の党首に挙げられ、佐賀軍側に立って戦闘に参加。敗北し政府軍に捕まって、身分をはく奪され、四月十三日に刑死。享年五十三だった。その後、名誉は回復されている。

没後百五十年の桜

佐賀県と北海道のつながりに関心を抱き、何度も佐賀県を訪れているのが、元北海道教育大学岩見沢校特任教授で（一財）北海道文化財保護協会副理事長の田山修三さんだ。「私は北海道文化財保護協会などで文章と絵を併用した絵手紙の形式で出前授業をしていて、二〇一一年に佐賀県議会の議員の方々が札幌視察に来られた際も、島の功績を絵手紙でお伝えしました。札幌市に本龍寺を含め三体もの銅像があり、市民が『判官さま』と島を慕っていることに皆さん驚いておられました。一方、私は佐賀県の教育現場の先進性と、博物館など県立の文化施設が入場無料であることに感心しました。佐賀の窓、札幌の窓、窓が違えば見える景色も違うけれど、根底には脈々と流れる歴史があることを島は教えてくれます。島は直正公が描いた蝦夷地開発に一身を捧げようとした古武士と言えるのではないでしょうか」。

元小学校教諭で学習指導要領の改訂にも関わった田山さん。板書術の著書も多数ある。



札幌市役所1階ロビーで2011年、絵手紙で佐賀県議会議員の皆さんに島の功績を説明する田山さん（写真中央）。

佐賀県では、島の没後百五十年を迎える今年、「島義勇顕彰事業」が行われる。佐賀県文化・観光局文化課の大森將史さんによると、改めて島の功績に光を当て顕彰することで、佐賀県出身の偉人に思いをはせ、郷土への誇りや愛着を醸成してほしいとのこと。また、佐賀県には〝幕末維新期の佐賀〟をわかりやすく伝える施設として佐賀城本丸歴史館や佐賀県立博物館（維新博メモリアル展示）、島にゆかりのある場所として島義勇銅像などがあり、北海道の方々をはじめ全国から来ていただけるよう島を敬慕する札幌エリアと連携しPRしたいとも。その一環として四月十三日から十二月三十一日まで、北海道神宮境内に県が制作した十枚のパネルが並び、島の生涯、ゆか

本龍寺（北14条東15丁目）の門前にあるガラス張りのケースの中に、大友亀太郎、二宮尊徳と共に島の像が鎮座している。

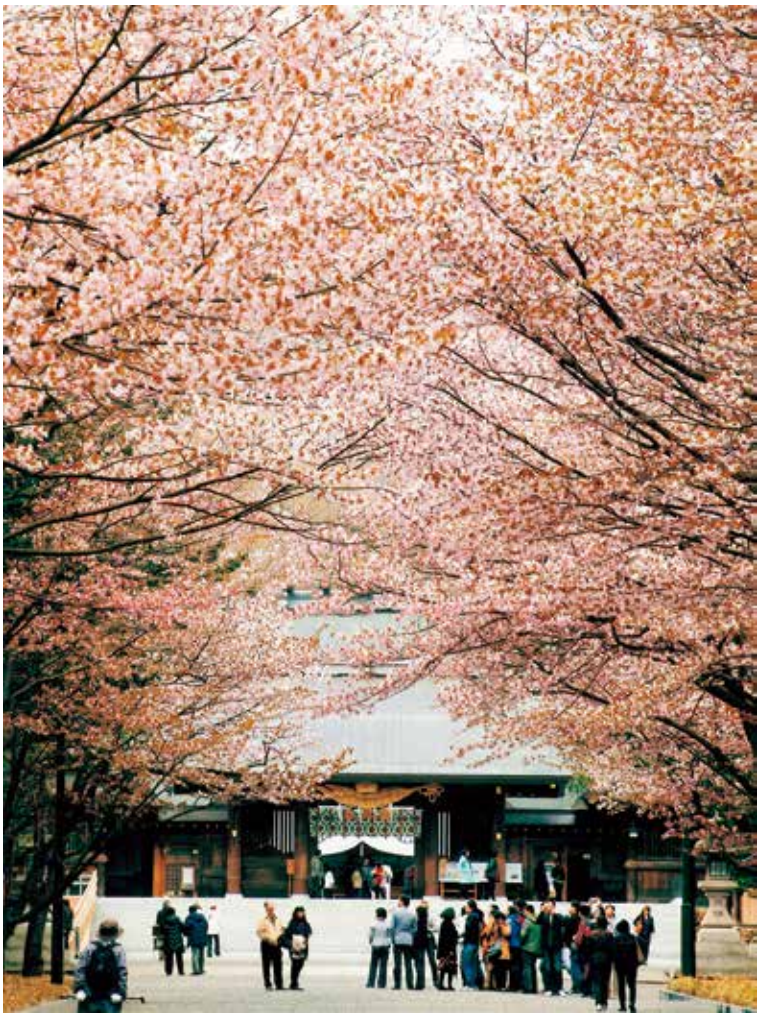
りのスポットが紹介される。また、同期間、境内の六花亭神宮茶屋店では、佐賀県との協力のもと、人気の焼き餅「判官さま」が没後百五十年限定パッケージに包まれてお目見えする。

札幌市民にとって春の象徴である北海道神宮の桜も島とつながりがある。前出の北海道神宮権禰宜 中島さんによると「島の死を悼んだ札幌郡上手稲村の福玉仙吉が、一八七五年（明治八）四月、百五十本の桜の苗木を奉納しています。大正時代に建立された碑には、島判官従者の福玉による献桜と刻まれていました」。福玉は島のことを話す時、目頭を押さえていたという子孫の話があり、深い思慕が感じられる。その後の研究で、福玉は幕末から発寒付近に住んでいたとされる。権禰宜の片石辰弥さんは「島と接点のあった松本十郎判官も境内に木を植え、その中に桜もありました。エゾヤマザクラ、ヤエザクラ、チシマザクラなど、約千本の桜が咲き、島の像にはシダレザクラが寄り添っていますよ」と言う。境内社である開拓神社には、島義勇本人が主君の直正と共に祀られている。

「厳寒を化して麗春と作さん」と、札幌本府建設にまい進した島義勇。百五十年を経て大都市となった札幌に、麗しき春が巡ってくる。Ⓙ

六花亭神宮茶屋店で焼きたてが味わえる「判官さま」。そば粉入りの餅の中に粒あんが入っている。没後150年限定パッケージは同店のみ。

北海道の礎を築いた先人37柱が御祭神として祀られている開拓神社。功績をまとめた『開拓の群像』（無料配布）が広く読まれている。



札幌に春を告げる北海道神宮の桜。写真提供＝北海道神宮